
騎士道

天宮紫苑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

騎士道

【NZコード】

NZ8937S

【作者名】

天宮紫苑

【あらすじ】

平凡を追求し続ける少年はある日平凡とは程遠い突然死を遂げる。死の世界に落ちた少年は平凡な死を求めて現代に蘇ろうとするが見事に捕まってしまう。罪人となってしまった少年に課せられた任務は一つ。アンドロイドとなつてある少女をヒロインらしく育て上げること。気がつけば騎士学校。よくわからん世界の仕組みとか使命とかに巻き込まれながらも彼は平凡求めて日々全力疾走。誰が主人公だか分からない。さて、誰でしょう？

序章（前書き）

残酷な描写があります。また、この物語はフィクションであり、実在する人物及び団体とは一切関係ありません。

序章

紅い小さな炎が灯ると同時にふわりと漂う香り。多数の者が良いと申すが自分にとつては悪夢の始まりを意味するもので、到底好きになれない。しかしそれも今日で終わるのだ。自分自身の手で、終わらせるのだ。

「随分と繁盛しているようではないか。」

「ええ、お蔭様で。」

「気に入らぬな。お前を最初に見つけたのはこのわしであるといふのに。」

するりと背中へと回された腕の感触を感じると口元に弧を描いた。「見つけた時は随分と汚らしかったが、着飾れば…」

低い声に溶け込むように息が乱れている。頬へと手を添えられ舐め回す様な視線を受ける。チリカンが可愛らしい音をたてながら揺れ、暗闇で灼然としている炎によつて煌いた。

「旦那、実は一つ御報告が…」

「む？ 何だ？ 言つてみろ。」

「身請け話が、私に」

「…なんだと？」

明らかに男の様子が変わる。低い声は一層低くなり眉は吊り上がりつた。肩を掴まれ加減無しに力をこめられる。

「まさか…受けるわけではあるまいな？」

「ふつ…ふふ。嫌ですね旦那。私には旦那だけですよ?」

「くつ、ふ、ははははは！…当たり前じゃーそれで、誰じや？そんなふざけた話をもちかけたのは…。」

傲慢な態度は相変わらずに。狂つたように笑つたかと思えば顔の距離を縮ませられ、そう問われた。

「誰でしょうねえ。」

男の脳がその言葉を理解する前に、思考回路はストップしてしまつ

た。しばらくして焼けるような痛みが男を襲う。黒とちつぽけな紅だけが浮かんでいた景色の中に、炎よりも濃いそれが広がっていく。

「汚い手で、触らないでくんない？」

引き抜かれてゆく銀色の刃。到底服の中に隠していたとは思えぬ程の大剣であった。何が起こったのか。やつと理解したらしい男は蒼白な顔で怒りを示した。何故だ、と掠れた声。

「やつと解放されるんだ、この生活から。お前みたいな気色悪い男の相手をしなくていいようになるんだよ。大体駄目だよおじさん。そういうことは“女”としなきや、ね？日本は将来子供が少なくて困るようになるんだから、さ。あ、でも今から増やしたら逆に高齢化が進むのか？あー、難しい難しい。考えるのやめた！」

男がとうに事切れていることなどどうでも良いといった様子で淡々と話し続ける“彼”的には周りなど最早見えてはいない。彼の目が映すものはこの先の未来だけ。先程まで浮かべていた巧笑とは打って変わって狂ったような笑いを高らかにあげていた彼が、気まぐれかそれとも単に飽きてしまったのかは定かでないがぴたりと止まつた。視線がゆっくりと落ちていき、血まみれの男が目に入る。氷より冷たく鋭い眼はまさに獣をイメージさせるものだった。そしてただ一言吐き捨てる。

「墮ちる」

そして判決は下るのです（前書き）

この物語はフィクションであり、登場する団体・人物などの名称はすべて架空のものです

そして判決は下ります

嫌だ、嫌だ嫌だ嫌だ嫌だああああああああ！－－戻りたくない！戻りたくないよ！俺はただ平凡に生きていたかつただけなんだよおおお！何でこうなった！？なんか俺が悪いことしたか！？中学で読書感想文の賞とったのが悪かったのか！？平凡な人生歩みたいんだつたらほんの少しの間だけでも周りにちやほやされたら駄目なのかよおお！？それとも何？平凡な俺が体育祭のリレーで一位になつたからか！？仕方ないだろうよ！クラスで一番足が速い田中がゴール直前にド派手にすつ転んで、2位だつた橋本も巻き込まれてすつ転んで、平凡真ん中の順位にいた3位の俺が巻き込まれずそのまま普通にゴールしたら必然的に1位になるだろうが！俺だつてその後皆からのちょっと冷たいような視線に耐えたんだ！お相子だろうが！つーか俺悪くなくね！ねえ！ねえねえねえ！神様怒つてんの！ねえ！俺はただ平凡に生きて平凡に死にたかっただけなんだ！それが原因不明の突然死つて非平凡すぎるだろうが！

少年の声が響き渡る。その手の平は随分と荒れてしまつていて所々に血が滲んでいる。爪は割れてしまつていて痛々しい。此処まで這い上がつてこれたんだ。きっと大丈夫。この死者の世界から抜け出して、また現代に戻つてみせる！一步一歩、というよりも一手一手といふべきか。苦痛に顔を歪めながらも、筋肉が限界だと震えようとも、少年は諦めない。平凡への執着。少年の強さはそこにあつた。下を見ていけない。あの魁偉な怪物や馨しい臭いがフラッシュバックしてくる。思い出すだけでも吐き気が込みあがつてくる。もう少し、もう少しだ。

「俺は、堕ちたくない！」

そう叫んだ少年は確かに光を掴んだ。

「あれ？」

目を開くとあの地獄のような場所とは程遠い空間に居た。現代の日本でも見られる光景であるが殆どの者が傍観側であろう場所。そのまま平凡に生きていたならばきっと此処に立つことはなかつただろう。ただ空間の構成がそれに似ているというだけで状況までもが同じとは限らないのだが。

裁判。

最初に浮かんだのはそれだつた。ちなみに言うと自分は裁判でいう被告人という立場にいるようだ。冷たい視線にぐさりぐさりと抉られる様な錯覚を起こす。頭痛がしてそつと頭に手を添える。そして気づいた。痛くない、何処も。驚いて手を見ればあれだけぼろぼろになつていた手が綺麗さっぱり元通りになつてゐる。手だけではない。身体の至るところに苦痛を覚えていたといつのに何事もなかつたかのようだ。一体何故?といつより、なんだこの状況。俺は墮ちずに済んだのだろうか。

「おい」

「は、はい！」

随分と混乱してしまつて、いたようで突然の呼びかけに声が裏返り身体は飛び上がつた。自分へと声をかけた男は深く帽子を被つていて表情は見えない。裁判官だろうか？それにしても態度が悪すぎやしないか？裁判中に煙草？というか、足を上げて椅子にふんぞり返つているのだが。これが裁判だと決まつたわけではないが。とりあえずあれだ。第一印象、最悪。

「混乱するつづーのも分かるが、正直めんどくせえからせつと終わらそうや。」

「は？」

「死者の世界“ヘルヘイム”からの脱出おめでとう。お前の感情つづーか、その、平凡への執着心？みてーなのが強すぎて迂闊に近寄れなかつた。お前は随分と優秀なエネルギー源らしい。」

「エ、エネルギー源？何を言つてるんですか！？」

「黙れ。被告人は静肅に！」

「なつ！」

どうやら俺からの発言は許されないらしい。ほくそ笑むその姿は俺が生きていた頃極悪ドSで有名だつた担任教師を連想させる。一度と会いたくない人物である。

「社長、ラタトスクから通信が」

「今いいとこだから切つとけ

「え、いや、しかし

「俺の言つことが聞けないつづーわけじゃねえよな？」

「喜んで切らせて頂きます」

「よしいい子だ。来月から給料倍な」

連想した人物とはどうやら格が違うらしい。性格的にも権力的にもつづーか裁判官じゃねえのかよ。なんで社長が裁判紛いなことしてんだよ。状況は全く理解できないが良くない状況であることは確かなんだよ。それにしてもラタトスクと聞こえたのは聞き間違いか？俺は結構本を読むのが好きで伝説や神話を読みあさつた時期があつた。うろ覚えで確かにどうかは分からぬけれど、神話にそんな名前の

栗鼠が登場していた気がする。こんなことを知っていたつて今の状況の情報の足しになりやしないけれど。

「簡潔に話そう。お前はこれからアンドロイドになる。」

「簡潔に話すすぎだ！全く話が見えん！」

「タメ口とか調子のんなよ罪人が！」

「しゅみません！」

か、格好悪い！心中で叫んだ。羞恥心から顔に熱が集まつてくる。今ならば顔でお茶が沸かせられるかもしない。そんな気さえする。思い切りかんでしまつた。笑ってくれればいいのに至つて眞面目な雰囲気を出す傍観席の方々。そして原因となつた社長はどうでもいい様子で煙草の煙を吐き出していた。

「しょ、詳細を教えていただけると嬉しいです。いきなりアンドロイドって、えつと」

「ちつ」

明らかな舌打ちにまた肩が飛び跳ねた。なんと情けない。

「いいか、お前は死んだ。そして死者が集う世界であるヘルヘイムつつ一所から脱出を試みた。だがな、死んだ者が再び生き返ることを望み実行することは大罪なんだよ、分かるか？あ？にしても、あんな高い崖をよくもまあ自力で這い上がつたもんだ。もうその時点で平凡なんてもんから離れてんだよお前は。ま、それは今置いといてだな。お前が掴んだ光はお前を拘束するためのものだ。光にエネルギーを注いで固体化させて…まあ専門的な知識はアンドロイドになつてから学べ。簡単に言えばあの光は現代でいう手錠だと繩だとかそういう類のもんだ。つまりお前は喜んで手錠に手を伸ばしたつづーわけ。とんだマゾだな。そういう趣味でも？」

「ないです！」

「そりや残念。ま、捕まつたお前はもちろん大罪を犯してしまつた人間として此処に連れてこられた。裁判所みたいだと思ったら？そう思つてくれていて構わない。大差ねえからな。ただ、この世界の法律は俺だ」

「は？」

「この東堂院隼人様が下す決断に意見も反論もいらねえ。ただ従え」

「ちょ、意味が」

「お前の理解力が『えしい』となんてとっくに分かってる。だから安心しろ？お前に課せられる償いの為の任務は実に簡潔で分かりやすい！」

いらっしゃったのは氣のせいではないはずだ。さつきから散々人を馬鹿にしてくれる。怪訝な顔をすれば愉快そうに笑われた。実に不愉快だ。

カンカン。

テレビのドラマなんかでしか聞いたことのない裁判の判決の音。苛立ちに混じり緊張が生まれる。一瞬身体中の血液が固まるような、酸欠したかのような。時間が止まつたという錯覚と同時にやつてくる息詰しきは随分と長く感じられた。

やはりそこは楽しげに言った。くい、と帽子を指先で上に持ち上げて。

「ANDROIDとなつてある女を誰もが認めるヒロイൻに育て上げる」

ああ、理解不能だ。

間違いは誰にでもあるものだ

「メッセージ ジュシンシマシタ」

機械的な音が決められた台詞を並べていく。どうぞと呴けばづらつらと並べられてゆく言葉。どうやら今回はイタリア語のようだ。この前はえらくマニアックな民族の言葉でメッセージを送つてこられたものだったので、解読にかなりの時間を費やしてしまった。よかつた、訳せる。ふうっと安堵の息を吐いた時、深い蒼の髪が風に揺れた。目の前にそびえ立つ優美な大聖堂。壮麗なその建物は見るもの全てを魅了してしまいそうである。やはりヨーロッパはいい。あ好き。本当に好き。純白で美しいこの神聖な場所があと数日で朽廃してしまつなど誰が考えるだろう。美しいものほど、その末路は凄惨を極めているものだ。幸福へと導く天使の羽でいっぱいになるんだろうな。翼をもがれた天使はまるで神に懇願するように床に這いつくばって、ああ、楽しみだ。一つ言つておこう。天使ほど残酷なものはいない。奴等の幸福と我々の幸福はずれてい。人間達はとんだ勘違いをしているんだ。ああ面白い。天使よりも悪魔のほうがずっと素直で可愛いといふのに。生き物を見た目で判断するのは良くないことだ。見た目が酷いものほどうまいというではないか。アレだ、アレ。天使は確かに見た目は華奢で好感を持つてしまうのも無理もない。だが見た目とは裏腹に無慈悲な心を持つてはいるのだ。ホステスに貢ぐサラリーマンのように、人間達はそんな天使や神を敬い慕う。実に滑稽だ。阿鼻叫喚な地獄絵図が広がるであらうことを頭に描けば無意識に笑みが零れた。

「レンラク レンラク
トウドウインハヤト
ツウシン シウシン

「フルルルルルル」

おひと、今度はメールではなかつたようだ。先程連絡をした時は部下のお姉さんが出たんだけど。久々の新人いびりは済んだらしい。全く、自分勝手な男だ。超絶ドSで欲に正直。まあ、嫌いじゃないけど。だいつすきだけど。

「はーー」

「おっせえ。とっとと出るよどうせ暇だ。」

「てめーに言われたくないわあほんだら。」

「うつせえ。で、なんだよ？用件は」

「ああ。実はさつき送つた資料に手違いがあつてね。ヘルヘイムから逃げちゃつた“源紺”についての。彼の死についての情報がちょっと違つてたみたいで。訂正したかつたんだけど、どうやら遅かつたようで。いやいや、すまなんだ。」

「…なに？」

「だから手違い。彼実はヘルヘイムに行くはずじゃなかつたみたいで。まあ色々じつた返しててねー。上の連中もちよいとパニクつてんだ。とつあえず事實を隠蔽してくれつて頼まれた。まあ遅かつたけど」

「おひ待て。もひつちは“おひち”に送つちまつたんだぞっ・ぢうすんだよ

「面白そうだしいいじゃない。放つて置けよ。しつちもだしいんだ、
秘宝探し」

「ま、そういうわけだから頑張れよ、罪人“源絆”」

「だーかーらーああああもうつうーー」

理解不能だつて言つてんでしょ! がーー何? アンドロイドつて! 口

ボット! ?

「携帯だけど?」

「け、携帯! ?」

「そ、携帯」

人差し指を立たせニヤリと笑う裁判官気取りな社長さん、東堂院隼人。彼の大まかな性格は大体分かつた。稀に見る行き過ぎた俺様タイプだ。顔によればその性格は許されないという理不尽なものである。多分平凡な容姿の俺がこんな性格を一日でもやってみたなら一発ではぶられる。悔しいけど、こいつなら許されるんだと思う。世の中不公平だ。思わず世間への愚痴を零してしまってそうになるが必定死で堪え話を進める。

「携帯になるつて、貴方頭大丈夫ですか?」

「おい。誰かこいつ縛れ。裁判官に対する暴言だ。即刻打ち首だ」「す、すみませんでした! ちょっと! 貴方達傍観席の人でしょ! なんでこっち来んの! ? 傍観だけしてろよおおおおお!」

手の平をだし制止の合図を出した社長さんは「冗談だ」とふつと笑つた。腹立つ。

「世界の仕組みとかそういう詳しいことは“学校”で学ぶだろうから此処では言わない。とりあえずお前は一人の女をヒロインらしく

育てればいいだけだ。」

「だからそれが意味わかんね……ほん。意味がわからないんです！
詳しく説明してください！」

「ようは習つより慣れろだ。どうせお前のそのひつけな脳みそじ
や今の状況を把握することで精一杯で、それ以上のことなんか考え
られねえだろ。」

「使い方違う！（悪かったな…）今この状況すら把握できてねえ
よ！（…）」

ぐつと拳を握り締め下唇を噛んだ。腹立つ腹立つ腹立つ腹立つ腹立
つ……怖いから絶対反抗なんかしねえけど…

「てなわけで、

連行へ…

またそいつは楽しそうに言い放つ。こいつがどんな気分かなんて知
つたこっちゃない。まるで悪魔だ。噂の小悪魔ってやつなのか！？
俺が見た小悪魔は雑誌の可愛い女の子が悪魔のコスプレして、ゴスロ
リチックな部屋にいいいタタタタタ！

「いてえよ！」

「拘束します」

「も、もうひょっと優しくしイテテテテテ…」

「ふつ…」

慣れた手付きでぐるぐると縄を巻きつけてこれでもかと力を入れて
縛つてくる部下の人は、若干俺をストレス解消機のように扱つてい
た気がした。

「さ、幕開けだ」

口角を上げて連行されていく彼を見送る。そういうればラタトスクから連絡がきていたな、と不意に思い出し最新型の携帯を手にとった。“源絆”についての情報が間違っていたといつ衝撃の事実を彼が耳にするのはこのすぐ後のことであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8937s/>

騎士道

2011年10月9日01時02分発行